

St. Luke's International University Repository

学生生活の実態（調査報告）:(その3)学生の実習に対する意識について:学生生活実態調査質問用紙（見本）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩井, 郁子, 伊奈, 侑子, 鈴木, 篤子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/85

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



参考文献

1. 石原幸子、看護婦の職業的信念（弁証法的看護の把握）、看護教育 Vol. 8, No. 11, 1967
2. 長谷川浩一、看護婦の意識に関する研究（Q—技法による検討）、神奈川県衛生短期大学紀要 I、1968
3. 徳永清他
 - 第1講 現代看護学生の特徴、看護教育 Vol. 11, No. 1, 1970
 - 第2講 学生指導の理念、看護教育 Vol. 11, No. 2, 1970
 - 第3講 学生指導の領域、看護教育 Vol. 11, No. 3, 1970
4. 丸橋佐和子他、看護の認識調査（看護学生と高校生を比較して）、看護教育 Vol. 12, No. 7, 1971
5. 高橋章子他、学生の看護婦像に関する研究—第1報一、看護研究 Vol. 5, No. 4, 1972
6. 氏家幸子他、大阪大学医療短期大学部看護科学生の動向（入学生の看護に関する意識）、看護教育 Vol. 15, No. 3, 1974
7. 高橋佐和子他、看護高校生徒および看護短大学生における職業観の発達に関する研究（職業観診断テストの結果分析）、看護教育 Vol. 15, No. 8, 1974
8. 小島礼子、看護学生の職業意識の形成に関する研究、看護教育 Vol. 8, No. 1, 1975
9. 前原澄子他、看護学校入学者の動向、看護教育 Vol. 16, No. 3, 1975
10. 吉田昇他、現代女性の意識と生活、NHKブックス 237, 1975

（その3） 学生の実習に対する意識について

岩井 郁子 伊奈 侑子
鈴木 篤子

はじめに

看護教育において、その教育方法の一つである臨床実習の意義、位置付けは大きく、教育目標を達成する上で、欠かすことのできないものである。臨床実習は、学生側に主体性があり、知識と技術の統合と応用が要求され、それと同時に病院という特殊な小社会の中で、学習をすすめてゆかねばならない。臨床実習をより効果的な教育方法として、展開してゆくためには、種々の観点から実習を評価、検討してゆくことが大切である。その中の一つとして、現代学生気質および学生のニーズを把握し、それらを実習指導の中に生かし、学習効果をあげようと考えた。実習は一方的に教授する講義形式と異なり、学生が主体的にとり組まねば十分な学習効果が得られない。その臨床実習を効果的にする為に1. 実習に対する満足度、2. 実習へのとりくみ方、3. 臨床指導者に対する学生の受けとめ方の三つの観点から若干の検討を試みた。

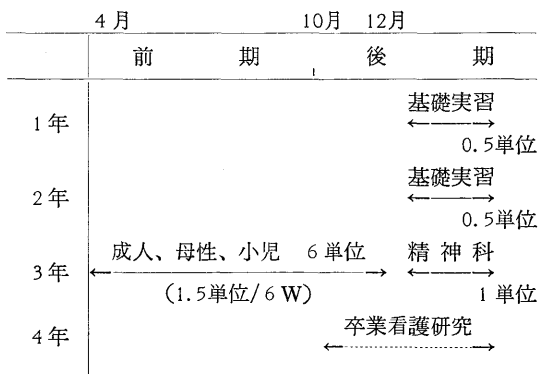
I 本学における臨床実習の概要

1. 四年間の臨床実習の進め方

本学における臨床実習の展開は、図1に示す通りである。臨床実習は3年次に集中している。1単位90時間¹⁾

で、4月～12月まで、3年生（45名）が4つのグループに別れ、成人看護学3単位（外科系1.5単位、内科系1.5単位）、母性看護学1.5単位、小児看護学1.5単位履修する。一週間の総実習時間は23時間である。

図1



2. 実習方法

臨床基礎実習、成人、小児、母性看護学の実習とも、受持患者を中心とした実習である。実習時の受持患者数は、学年、学生の能力、実習目標によっても異なるが、

1) 昭和51年度学則改正により実習は1単位45時間に変更となった。

1～2名である。成人看護学を例に述べてみると、3単位の実習で受持った症例数は平均8例であった。

3. 臨床指導者

臨床指導者は、本学の教員で、各臨床場面をフィールドとして、固定し、その場に来る学生を指導している。学内での教育に直接的、間接的に参与しており、学習背景にそくした、継続的な教育がなされている。臨床基礎実習の指導は、1人の教師が4～5名の学生を指導し、成人、小児、母性看護学の実習では、4～6名の学生を指導している。教師は、実習開始時から終了時まで臨床の場で学生指導にあたっている。

II 調査結果

問10 あなたは今までに充実した実習が出来たと感じたことがありますか

- A：よくある。
- B：ときどきある。
- C：ない。

学生全体を通しての結果は第1位ときどきある71%、2位ない20%、3位よくある8.6%であった。学生全体からみると実習には、常に充実感を持っているとはいえないであろう。さらに学年別にみると各学年共にその傾向は全体のものと同じであると言える。

充実した実習が出来たと感じる事がよくある、ときどきあると答えた者のうちその理由をみると、学生全体の結果からは、①患者に喜ばれた時、②実習の計画を準備して実習に望んだ時、③自分の心身のコンディションが良いとき、となっている。さらにこれを学年毎の結果でみると全体の傾向とほぼ同じであると言える。1年生では患者に喜ばれたときと答えた者が29名と、とくに多く初めての实習であることからうなづける。実習のグループで気の合った人達である時の項は数として殆んど出て来ていなかった。実習の充実感に対して、グループメンバー相互の影響はあまり関わりがないものと言えるだろう。

問11 病気以外で実習を休みたくなり、休んでしまうことがありますか

- A：よくある
- B：ときどきある
- C：ない

問11-1 A、Bと答えられた方にお聞きします。それは、どんな時ですか、三つ以内を選んで順位別に回答用紙に記入してください。

- a：勉強していないとき
- b：個人的問題で悩んでいるとき
- c：指導者と性格が合わない時
- d：受持患者と性格が合わない時
- e：ケアする事があまりなく張り合いがないとき
- f：受持患者が重症で恐しく感じる時
- g：何となくいやな時
- h：その他

学生全体では、1位ときどきある55%、2位ない40%、3位よくある0.4%であった。学生の半数以上が実習以外の事で、ときどき休んでしまう事があると答えている。各学年毎にこれをみると、1年生はない、ときどきある、よくある、の順であり、半数以上の者は、休まないと答えている。1年生の4分の1の者は、よく休むと答えている。2年生ではよく休むという者はないが、ときどき休むと答えている者が、約半数あることがわかる。3年生、4年生では、多くの者がときどき休むと答えている。学年が進むにつれて、実習時間が多くなるが、病気以外で休む傾向が大きくなると言える。

次に休む理由をみると、学生全体では1位勉強していない時、31.2%、つぎに実習以外の個人的な問題で悩んでいる時、21.8%、特に理由はないが何となくいやな時、となっている。全体的にいえることは、実習のための準備が不充分であり、個人的に悩みごとがあり、なんとなく気が進まない時に、休むという傾向がみられる。また小数ではあるが、指導者と性格が合わない時と答えている者もある。学年別にみると全体の傾向とほぼ同じである。各学年共、指導者と性格が合わない時と答えているものが小数ずつみられる。

問12 あなたは臨床の場でどのような時に教師を必要としますか、三つ以内を選んで順位別に回答用紙に記入して下さい

- A：新しい経験をする時
- B：看護計画を立てる時
- C：患者から質問されてわからないとき
- D：患者や家族とのコミュニケーションがよくとれないとき
- E：文献をしらべるとき
- F：その他

臨床実習の場でどのような時に教師の援助を必要としているかという問の結果を全体的にみると、他をひきはなして最も多いのが、1位新しい経験をするとき85.8%、看護計画を立てるとき6.8%、コミュニケーションがとれないとき2.5%であった。本学における臨床実習は、実習目標を達成するための一般理論及びその展開の

仕方までは演習などでとりあげているが、技術（処置、実際的なケア）は、あるものはデモンストレーションのみで、あるいは全く経験のないまま臨床の場面で新しい体験をすることが多い。また、臨床実習の時間数は1人あたり、1年次45時間、2年次45時間、3年次540時間（精神科実習を除く）となっている。また実習の方法は受持患者制で、受持患者を中心とした経験が主であり、経験項目のチェックリストや必須の経験内容も規定しないため、どの場面においても、生活の援助技術を除いては新しい体験をすることが多い。このような特徴からも、アンケート結果において新しい経験をするとときに援助を必要としている学生が他をひきはなして多いことは当然といえよう。4～5名の学生に1人の教師がついており、新しい経験をするときはそばで指導することが原則になっていることから理解できよう。

学年別に見てゆくと1年生は、新しい経験90.9%、看護計画、質問されたとき、コミュニケーションとなっている。2年生は、新しい経験92.1%、看護計画立案5.3%、という結果であり、3年生は新しい経験をするととき77.3%、看護計画立案5.3%、コミュニケーション4.5%、という結果であった。3年次は、成人、小児、母性の臨床実習が継続している時期であり、1位の援助の求め方が、少しバラつき、看護計画立案の項目が出てきている。4年生は新しい経験83.3%、看護計画立案、コミュニケーション、という項目があげられている。3、4年生は、主体的に看護計画を立案し計画に基づいて行動をする実習であり、看護計画立案時に援助を求める割合は多くなっているが、4年生でも、新しい経験をするとときに援助を求める学生が多いことは本学の特徴であろう。主体性がないというよりも、すぐそばに教師が存在しているということで、このような結果が出たのかもしれない。アンケートの項目のその他に挙げていることは、3年、4年が殆んどであるが、自分が行った看護を評価するとき、行動や態度を自己評価するとき、実践の途上でゆきづまったとき、看護問題の分析、解決にゆきづまったときというように客観的な教師による評価や援助を求めている。

問13 実習中の教師の指導をどのように感じていますか。三つ以内を選んで順位別に回答用紙に記入して下さい

- A：実際の看護の方法を学ぶ事ができる
- B：いてくれるだけで心強い
- C：わからない事を質問できる
- D：患者とのコミュニケーションの仕方を学ぶ事ができる

E：自分の不備な点を指摘されるようで緊張してしまう

F：過保護されているような気がする

G：もう少しまかせてほしい

H：その他

教師の指導をどのように感じているかという問の答えについて全体的にみると実際の看護の方法を学ぶことができる27.8%、わからないことを質問できる24.1%、実習場にいてくれるだけで心強い17.3%、という結果が得られた。この数値は教師との望ましい相互関係を伺わせるものとも言えよう。

学年別に見てゆくと1年生では看護の方法が学べる、わからないところを質問できる、心強い、などが挙げられている。1年生の実習指導は3～5人に1人の教師が指導にあたっているが、過保護されていると答えたものは1名もなく、まかせてほしいという学生が2名だけであった。2年生では1位に自分の不備を指導されるようで緊張してしまう、質問できる、看護の方法が学べると挙げている。2年生で、特徴的なのは、自分の不備な点を指摘されるようで緊張してしまうという学生が多いことである。このような結果の背景として考えられることは、2年次の実習は成人看護学の病棟演習で、それまでに学習した知識、技術を看護に応用するという、自主的な活動が主となること。また、1年次の実習から、空白期間が長かったこと、断続的な1週に1度という実習の仕方であったことなどが挙げられるが、明らかな原因は不明である。3年生をみると看護の方法が学べる、質問できる、心強いが挙げられ、3年生は4月から12月迄週23時間、継続的な実習があり、もう少しまかせてほしいということが6.8%の割合で挙げられている。

4年生は質問できる、看護の方法が学べる、心強いが挙げられている。

問14 臨床の場で教師にどうあってほしいと思いますか、三つ以内を選んで順位別に回答用紙に記入して下さい

- A：応用能力を引き出せるような助言を与えてほしい
- B：自主性を尊重してほしい
- C：専門知識が豊富であってほしい
- D：思いやりがほしい
- E：きびしく指導してほしい
- F：友達のものであってほしい
- G：細かい注意を与えてほしい
- H：気分のむらをなくしてほしい
- I：個人的な問題についても相談してほしい
- J：物的、人的環境をととのえてほしい

K:その他

臨床の場で教師にどうあって欲しいかという問の結果を全体からみると第1位応用能力をひき出すような助言を与えてほしい55%、つづいて学生の自主性を尊重してほしい12%、気分のむらをなくしてほしい8%。第2位には専門知識が豊富であってほしい23%、自主性を尊重してほしい16.6%、応用能力を引き出すような助言を与えてほしい14.8%であった。第3位気分のムラをなくしてほしい20%、思いやりがほしい、専門知識が豊富であってほしい、実習場の人的物的環境を整えてほしい、各々11.1%であった。全体的な結果から言える事は学生の望む教師像は「応用能力を引き出すような助言を与えてくれて、専門知識が豊富にあり、かつ気分のムラがない」という事になる。

学年別結果の比較ではどの学年も教師に対して望む事は、全体の傾向と変わらない事が言える。厳しい指導をしてほしい、友達のようにあってほしい、個人的な問題についても相談してほしい、という項目はほとんど出て来ていない。

又1・2年及び3・4年を対比してみると、わずかながら学年による違いがあると思われるのは1・2年では細かい注意を与えてほしいという意見が出ているのに対して、3・4年では出ていない。又1・2年になくて3・4年に出てきているのは、実習がしやすいような物的、人的環境を整えてほしいという項目である。これらは1・2年は実習時間数が少なく、3・4年はすでにかかりの実習時間を経てきているという本学のカリキュラムの流れにおける特徴が反映しているものと推察される。

III 考 察

すでに述べてきたアンケート結果からもわかるように、実習では70.0%の者が、時々充実感をかんじたと答えており、よくある20%、ほとんどない8.6%と、全体からみて、実習の満足度はあまり高くないと思われる。充実感のもてない理由を質問していないため、原因はわからない。充実した実習が出来たと感じるのは、よく準備されており、身体のコンディションが良く、患者に喜ばれ、又臨床指導者から認められた時と考えられる。臨床指導には、良い看護が行われた時、その点を大いに認めるような指導が大切とも言える。4年生では充実した実習が出来たと感じた者が0であったが、この理由は、明確に把握できない。卒業の近いこの学生達が、このような答えをするのは、注目すべき事と思われる。

充実感を感じていない学生の中では、看護感に大かたかな変化があると答えており、学年が進むにつれて、その変化は、看護する事のむずかしさを増強し、看

護を将来の職業と考えることに少なからず不安を持っていると解答しているが、一方、充実感がいつもある者は、看護感の変化も好ましい方向にあることが認められる。看護する事に大きな意義もっている。このことは学生生活全体にも、他にも影響しており、充実した実習をしていると感じた者は、学習も充実していると答え、学生生活も充実していると答えている。今まで述べてきた実習の満足感については、本学において前回に行なわれた調査¹⁾と、ほぼ同じ内容の結果が得られている。

実習へのとりくみ方では、前回の調査では、実習以外の事で休みたくなる事がありますかの質問にときどきある87%、よくある6%、まったくない7%であった。休みたくなって休んでしまうかどうかはこの間からはわからないが、休みたいと思う割合は、前回、今回の調査結果と、それ程へだたりはない。又、その理由として実習の準備のしていないとき、個人的な悩み、なんとなくあるが、個人的な悩み、なんとなく、とその時の気分で休んでしまうと答えているのは、臨床実習に対する意義や価値感の認識に問題がある。又一方、実習そのものに、魅力があれば、そんな考えも打消されるとも考えられる。学生の主体性をもとめると共に、実習における教師の良き動機付け、主体性を引き出すような指導方法を今後もさらに考えてゆくことが大切であると考えられる。

臨床場面において学生は、新しい経験をし、看護計画を立案する時に教師を必要としている。又教師の指導に対する受け止め方は、「看護の方法を学べる、わからない事を質問できる、そばにいてくれるだけで心強い」といった教師と学生の相互関係としては望ましい方向で受けとめている。そして最終的に学生が望んでいる教師像は「応用能力を引き出すような助言を与えてくれて、専門知識が豊富にあり、かつ気分のムラがない教師」という事になる。

看護教育において、教師は学生と教室内の教壇の上と下という平面的場面だけでなく、臨床場面(実習場)という動的、立体的場面でより直接的にかつ密接に学生と関わり合うので、いわゆる他の一般大学と比べると、教師が学生に及ぼす影響は多大である。現に指導者と性格が合わないとき実習を休んでしまうという学生があり、又教師は気分のムらをなくしてほしいといった答えがかなりある事から見ても教師自身が直接的に学生に与える影響を、教師1人1人があらためて自覚しなければならない。

学生の学習意欲(ことに実習に関して)を高めるために外側から与えうる条件としては、1.教師そのものの質

1) 「臨床実習指導の一考察」—聖路加看護大学における一高橋シェン他、1969

2. 臨床実習場の質 という2つがあると考えられる。2についてはここでは述べないが、1については臨床指導にたずさわる教師個々の最も大きな課題である。

今回の調査では学生は教師を臨床場面においては欠く事のできない存在として受けとめている事からもこれをさらに有効に活用し、かつ学生が望んでいる教師像として、期待に十分答えるような教師になるべく、努力する事、さらには、「望ましい学習活動」のもつべき特徴を再確認しつつ学生の学習意欲を増すように努める事が教師に要求されていると考える。

おわりに

学生に行ったこの少ないアンケート質問項目から、学生の持つ実習に関する多面的な姿勢をとらえる事は難しい。

実習については、学生には主体的な実習を自ら行うように求められるし、指導者には、指導者としての資質の向上がのぞまれる。

学生の学習背景には、日常生活の過ごし方も大いに関係しており、学生としての生活態度を含め広くニーズを把握することが大切になる。今回の調査結果を生かし今後の臨床指導のあり方を検討してゆきたい。